

「インフラストラクチャーの政治」をいかに捉えるのか
——その視点をめぐって——

三浦 倫平

三浦です、よろしくお願いします。今回、このような貴重な場に呼んでいただきありがとうございます。どの報告も、事前にいただいた論文も、非常に興味深いもので、とても勉強になりました。

なぜ私が呼ばれたのかは、まだちょっと分かってないところもあるんですけども、考えてみると、自分は世田谷区における都市計画をめぐる反対運動を研究¹してきていて、都市計画っていうのはある意味インフラストラクチャーみたいなものなのかなって思うんですね。私の事例で争点となったのは、単純に「都市計画を推進する行政、資本 VS 住民」みたいな、よくある二項対立的な単純な図式じゃなくて、一定数の人たちが、インフラストラクチャーを利便性とか安全性っていう観点から受け入れる部分があって、そういう状況下で、反対運動をやっている人たちも一部、そういうインフラの利点を理解している。そういう状況下で、どういうふうに運動が行政や開発資本に対抗していくことができるのか、みたいなことが、自分のなかでひとつテーマだったように思うんですね、思い出してみると。

ブラックボックス化されたままのインフラをいかに問題化するか

これは全然関係ない話なんですけども、最近、都市の景観みたいなものが、どこにでもあるような、均質化しているんじゃないかって思うんですね。今日、豊橋駅に初めて降りたんですけども、自分の地元の川崎の溝の口駅と全く同じだなと思ってびっくりしたんです。すぐ Suica でぱっと入ってぱっと出て、なんか本当にインフラストラクチャーってすごいなって、衝撃でした。景観だけでなく、人の動き方までも均質化しているというか何というか。これまでは、「ファスト風土化」みたいな形でそのような状況を批判する言説が出てきたけれども、それに対抗する形で、「でもそれは人々が受け入れているから問題じゃない」みたいな形の言説が出てきていて、今度はそうした言説に対抗することがなかなか出来なくなってきちゃっているような気がするんですね。「今の都市の景観や風景をどう問題化するか」っていう本の企画があってですね、私が編集者の一人なんですけれども、工学の人達と学際的にやろうと思っていて、いろんな人にお話をして、何かご自身で批判的な視点を確保して、今ある都市の景観を問題化するような、もしくはそのきっかけになるような論考を作ってくれませんかという形でお願いはしているんですけど、お願いしている私が全く書けないっていう状況です。

なぜ書けないかという、多くの人が消費社会のインフラっていうものを問題化せずに受け入れていく部分が少なからずあると思うんですね。たとえば、ショッピングモールって、どこにでもあって、つまらないなとは思っただけけれども、同時に、便利だなんていう部分もあって、どこ行っても安心してサイゼリヤに行けるとか、安心してどこのお店にも行けるみたいな

¹ 三浦倫平、2016、『「共生」の都市社会学——下北沢再開発問題のなかで考える』新曜社。

ところがあると思うんですね。これまでの都市社会学だと、そういうことに対する反対運動みたいなものが起きた場合に、そうした運動を拠点に研究者が分析するといったやり方が、ひとつの主流だったかなと思うんですけど、それが無い場合に、そのインフラをどうやって問題化すればいいんだろうっていうことを最近考えています。つまり、今回のテーマでいえば、災害現場で、日常性が切断されて、ある種インフラが問題化するわけですけど、そういう場合だったら、いろんなものが出てきて問題化しやすいんだけど、逆にそうではなくて、ブラックボックスのままの状況のなかのインフラを問題化しようと思ったときに、どういうふうに問題化すればいいんだろうっていうことを最近ちょっと考えていて、何かアイデアをいただけたらいいなと思って、今日、私は楽しみに来ました。

半分雑談なんですけど、先ほどの森元齋先生の話聞いていて、自分が用意してきたコメントっていうのが本当に溝にはまっていて、ちょっとマズイなと思ってます。用意してきたコメントは、なんか抽象的な話ばかりだになって、ちょっと今反省してるんです。だから、かなり即興的にやっていこうかなと思うんですけど、学問的にすごく興味があることだけは、ちょっとつまらない質問になるかもしれないんですけど、聴いていこうかなという形で、各先生にコメントをさせていただければなと思います。

阪神淡路大震災をめぐる研究と比較して

全体的な印象ですけども、学問的には、自分は都市社会学とか地域社会学っていうものを研究しているので、空間っていうものを都市社会学・地域社会学がいかに扱うことができるのかっていうことは、すごく重要なテーマだとずっと思っています。それはまた、学問の世界だけじゃなくて、現実の世界においても、たとえば東日本大震災っていう現実においても、インフラが破壊されて人びとの生活を支える空間そのものが危機に瀕して、それこそさまざまな問題が噴出してきたっていう点でも、すごく重要な問題として具体的に出てきてるんだなと思うんですね。

自分の話をすると、阪神淡路大震災の時っていうのは、まだ高1とか中3とかで、テレビなどでしかその状況を見てないんですよ。その時、私は東京に住んでたので、好きだった女の子がその時神戸にいたんですけど、すごい心配だったんです。当時、ネットとかもないんで。そのことは、いつもフラッシュバックして思い出します。それはどうでもいいんですけど。なので、被災の生々しい現実っていうのを初めて目の当たりにしたのは、今回の東日本大震災が、私にとっては初めてでした。新潟県中越地震とかもあったと思うんですけど、その時は行けなかった。で、今回は、登壇者の方々、比較的な同じ世代の方々が多いのかなと思うんですね。ある意味、第二世代というか、阪神淡路に直面して研究をされてきた第一世代の次の世代なのかなって勝手に思っています。そうすると、今回のインフラストラクチャーの政治っていう理論的枠組は、「第一世代の理論枠組みでは、うまく東日本大震災の現実を捉えきれない」という違和感みたいなものがあって提示されたのかなって、読んで推測したんですね。そうじゃないのかもしれないですけど。その辺がどうなのかなっていうことを知りたいなというのが第一の、皆さん全員への質問っていう感じですね。どなたでもいいんですけど、考えがあれば、後でお聞かせいただければなと思います。

エージェント性は関係的にのみ存在するのではないか

あとですね、各先生ということなんですけど、植田先生へのコメントです。植田先生っていうのもなんか恥ずかしいので、植田さんという普段の呼び方にさせていただきたいんですけど、

植田さんに質問したいのは、まず、これが基本的には全体的なまとめという位置づけになっているのかなっていう気はするんですけど、そのまとめ方に他のみなさんがそもそも合意しているのかってというのは、また後で余裕があれば聴きたいなって思いがあります。で、細かな質問は飛ばして、大きなところでいうと、先ほどもご自身でおっしゃられたように、知をすごく問題視されていますよね。それがずっと、植田さんの問題設定だったと思うんですね。で、変革の潜勢力として知っていうものを想定するというようなことだと思うんです。それはすごく分かるんですけど、ただ、やっぱ、Actor Network 論とか、Michel Foucault の統治性の議論とは、それはちょっとずれる部分があるんじゃないかという気がしています。つまり、Foucault とか Actor Network 論というのは、知とか権力とか主体っていうものが複合的に絡み合っている、作動している様子っていうものを捉えようとしていて、何か特定の要素を特権的に扱うっていうよりは、要素間の関係性を見ようとしてるんじゃないかなと思うんですね。つまり、そのエージェント性ってというのは、関係的にのみ存在するって議論じゃないかなと思っていて、「知です、知が大事です」っていうふうに予め前提に置いちゃうってのはどうなんだろうかっていうところが、ひとつの疑問点でした。

これはおそらく、「urban assemblage 研究が批判的都市研究たりえない」という批判を受けていて、それを乗り越えるために何か変革の潜勢力って論点を出さなきゃいけないっていうふうに考えて、それを出してるんじゃないかなって思うんですけど、私が思うに、敢えて変革の潜勢力がこれです、みたいな感じで出さなくても、Actor Network 論みたいなものに最後までこだわって、現象の複雑な相互関係性みたいなものをとにかく記述すると。とにかく具体的に記述していったら、そうすることによって、単純な因果関係では捉えることができないような現象が見えてくると。そうすることで結果的に、何かオルタナティブみたいなものを提示することができるかもしれないんじゃないかなという印象があります。なんか、安易に David Harvey の議論とかと結び付けちゃうと、結局、資本主義体制みたいなところに落とし込まれちゃうような気もするって点ですね。その点についてどう思うかっていうことが、ひとつ聞きたいことです。

Foucault の研究をいかに都市研究に活かすことができるか

西川先生へのコメントとしてですね、自分もあんまり Foucault とか詳しくなくて、教科書的なことしか知らなかったの、すごく勉強になったってことがまず第一にあって、やっぱ、Foucault の研究をいかに都市研究に活かしていくことができるかっていうのが、自分にとってのひとつ大きな問題関心で読んでたんですね。今日の発表ではなかったですけども、事前にいただいた論文では、都市社会学についてもすごく研究されていて、これまでの都市社会学が都市生活を支えるインフラや自然環境の側面を十分に論じてなかったとか、また新都市社会学にしても、資本主義システムに従属するある種の技術としてしか扱ってこなかったという主張は良く分かりますし、この後の岩館先生の話ともつながってくる論点だと思って、すごく共感しました。

で、質問っていうか、自分の考えたことなんですけど、いかにこれから Foucault の議論を我々が活かしていくことができるのかっていうことが、試されているんだろうなって思うんですね。日本だとやはり、Foucault の権力論とか統治性の議論って、都市研究においては、あまりうまく展開されてないんじゃないかなって印象があって、もしご存知だったら教えていただきたいんですけど。本当に、吉見俊哉先生とか、ぐらいじゃないかなという気がしていて、なかなかないんじゃないかなと。やっぱそれは、ある種の難しさみたいなものがあるんだろうな

って思うんですね。もし、自分がやるのであれば、やっぱり Foucault がやったように、相当歴史的な研究にならざるを得ないのかなと。その歴史的っていうのも、本当に、かなり歴史的な厚みがないと、モノがヒトに与える影響みたいなものって、なかなか見えてこないかなと思います。5年10年のスパンじゃ、なかなか見えづらいものがあるんだろうなという気がしていて、この辺、何かアイデアがあれば教えていただきたいなというのが1点目です。

「モノが力を持つ」と「モノが主体性を持つ」は違うのではないか

もう1点は、さっきの話で、モノの主体性をどう考えるかっていうことです。お話をうかがって、岩館さんの話にもつながってくるんですけど、「やっぱりモノっていうのは、人間が制御できない部分があって、モノが力を持つっていう部分があるんじゃないか」っていう話があったと思うんですね。そこは、言葉遣いの問題なんだと思うんですけど、「モノが力を持つ」っていうことと、「モノの主体性」って、同じようで違うんじゃないかって思っていて。あと、「モノ性」とかも出てきたと思うんですけど、この辺をちょっと後で整理したほうが、みんなで議論しやすいかなって気がしていて、これは西川先生にっていうことでもないんですけど、みなさんに、その辺どう考えるのかっていうことですね。

マテリアルなものは統治性にどう効いてくるのか

時間がないので次に行きますと、岩館先生の研究ですけど、すごく興味深いなって思って拝見してたんです。集合的消費っていう概念をもう一回現代に生まれかわらせようっていうのは、とても野心的な研究だなって思いました。特に、Manuel Castells の集合的消費の消費のあり方が、ある種一面的っていうか、集合的消費手段の存立のあり方を十分に議論できてないっていうことは、すごくその通りだと思いますし、その集合的消費手段と知識、さらに人々の身体っていうものの相互の関係性をみていこうっていうのは、すごく面白かったです。本当に、面白かったとしか言いようがないんですけど、時間の関係上多分言えなかったんだと思うんですけど、具体的な分析の部分が省略されていて、Actor Network 論ってどう展開されるんだろうかっていうのが、自分は全然専門じゃないんで、ちょっと分かりづかったので、もし余裕があれば、もうちょっと説明していただきたいなっていうのがあります。特にモメント4っていうのは、すごく重要な局面だと思うんですけど、頂いた論文でも事実関係が淡々とあって、どうアクターの動員が可能になったんだろうかっていうところが、ちょっと分かりにくかったので、余裕があれば後で説明していただきたいなって思います。

あと、分析においても、マテリアルなものっていうのが、どう統治性に効いてくるのか、ちょっとまだ良く分からないっていうか、やっぱり、あくまでも要素に過ぎないのかなって言うようにも見えるんですね。「コントロールできない物質性」っていう意味では、たしかにそうなんですけど、それもある種の要素だって考えて、モノに主体性はなくて、人間にしか主体性がないっていう考えで議論しようと思えばできるかなって気もするので、その辺、どうお考えかなっていうことですね。

あと、これは細かい話なんですけど、前半にネオリベリズムの体制下における新しい介入のあり方として、自らを査定する主体が出てくるっていう話があって、それ、すごく面白いなと思ったんですけど、後半の水道の分析では、それは出てきますか。自らを査定する主体っていう論点は、どこで出てくるのかなって言うのも、後で教えていただけたらということですね。

WhiteheadとLatourのActor Network論のつながりについて

森元齋先生へのコメントですけれども、私はもう、Alfred North Whiteheadのことは全然知らなかったもので、御本²も買いましたけど、すごく難しくって(笑)、難しいのに英語の論文が送られてきて、さらに難しいっていう、何重にも難しかったんですけど(笑)、ちょっと読んで、それなりに理解できたかなという気もするんですけど、それでもすごく難しかったです。自分で分かった範囲で言うならば、既存の理論とか概念みたいなものを、そのまま持ってきて現実を捉えるんじゃないくて、具体的なナマの現実から知恵を引き出していこうっていう研究姿勢を、彼は持っていたのかなと思いました。それは、私が興味を持って見てきたLouis Althusserも、わりと近い考え方だったと思うので、すごく共感できる部分があったんですね。この本のなかにも出てくる、常に変化していく対象ってものをどういうふうに記述することができるのかって話、記述した瞬間に対象の具体性みたいなものが零れ落ちてしまうみたいな話ってのは、実証研究でもぶつかる課題で、自分もすごく悩んだことがあったので、すごく共感できました。で、森先生にうかがいたいのは、もう、ほとんど言いがかりなんですけど、WhiteheadとBruno Latourのつながりについて、もしご自身のお考えがある部分があったら、教えていただきたいなって思うんですね。論文とか今日のお話だと、そこまで具体的に明示的にはお話しされていないかなと思うんですけど、やっぱりLatourってというのは、結構Whiteheadに影響されているんじゃないかなと思います。個人的に思うのは、両者の共通点として、自然と人間と分けて考えるのではなく、それらを全て包括して捉えていこうとする点、物体のような非人間も潜在的なものを開花させようとするという意味で主体性があるとする形而上学的な仮定など、基本的な点はかなり共通点がある。

Whiteheadを研究されてきた森先生からすると、LatourのActor Network論ってというのは、Whiteheadのアイデアを実証研究につなげていくうえで評価できるものなのか、何か課題があるとしたらどういったところに課題があるのかってということについて、もし何かお考えがあれば、教えていただくと、今日、みなさんも共有できる部分があるんじゃないか、ためになる部分じゃないかなと思います。

自分が思うに、モノじゃなくて、主体の捉え方が、WhiteheadとLatourだと、ちょっと違うのかなって印象があります。あんまりうまく言えないんですけど、Latourの場合は、やっぱりLatour本人の研究主体が、具体性から見ているわけではないし、研究対象となる主体も、具体性から立ち上げているわけではないのかなって感じがしています。さっきも出たかもしれないですけど、Whiteheadの「抱握」は原因と結果というふうに分けずに、現象全体を直観と科学的認識の両方で捉えるもので、科学的認識も大事にするけど直感も大事にするみたいな、そういう主体の捉え方だったと思うんですけど、Latourの主体ってというのは、本人も対象者もかなり理性的というか、そういう部分があるんだろうなという感じがして。でも、それは実証研究に落とし込むうえでは、しょうがなかったのかもしれないんですけど、その辺、どう考えるのかなってものを、お話をうかがえたらなと思います。

軍事的合理性の市民社会への侵入は何をもたらすのか

あんまり時間ないですね。森啓輔先生へのコメントですけれども、安全な空間を作り出すために、警察とか軍隊が規律権力を行使し始めているって話はずごく興味深くて、特に震災が起きた時の自衛隊の支援活動をめぐる報道とか、メディアだけじゃなくて、人びとの流す

² 森元齋、2015、『具体性の哲学——ホワイトヘッドの知恵・生命・社会への思考』以文社。

Twitterでのつぶやきとかを見ている、結構うすら寒い感じがしたので、とても共感する部分があって、何か気持ち悪いなと思っていたことをやってくれていた、すごく面白かったです。たぶん今回は、基本的に、自衛隊的なるものというか、自衛隊が市民社会のなかで受け入れられるようになったプロセスっていうのを、歴史的にも、実際に3.11以降からも、かなり詳細に描きだしているんだろうとは思んですけど、これは今後の課題なのかもしれないですけど、結局、自衛隊がどういう新しいインフラストラクチャを作り上げたのかっていうことに関しては、十分には分からなかったかなっていう気がしています。レスキュー・エージェントとしての軍隊のイメージが強まったとか、軍事的合理性が市民社会のなかに侵入していったっていうことは、すごく分かるんですけど、そこからどういう変化や影響が起きたのかっていうことが、ちょっとまだ分からなかった。それは多分、最後のHarveyの話がそこにつながってくるんだろうとは思んですけど、もう少し何か具体例があれば、教えていただきたいなっていうことです。やっぱり、軍事的合理性は、単に軍隊だけじゃなくて他にもいろいろありえるのかもしれないなと思っていて、それこそ警察とかもあると思うし、もしかして、資本もあるかもしれないし、その辺、どうなっているのかなっていうのを、聴かせていただけたらなと思います。ということで、すみません、長くなりました。